
瓦礫に日傘/銀魂/沖神

槻夜 七瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瓦礫に日傘／銀魂／沖神

【Nコード】

N0693F

【作者名】

槻夜 七瀬

【あらすじ】

のんびりと昼ドラを見ていた万事屋三人組。ドラマが中断され、臨時ニュースとして伝わってきたのは、大規模な爆弾テロで……

001 (前書き)

PV数15000突破ありがとうございます！

全て皆様のおかげです！

これからも宜しく願います^^

『えー番組の途中ですが、ニュースをお伝えします』

「はあ？　せつかく【渡る世間は鬼しかいねえコノヤロー】見てたのに！　何のニュースだコノヤロー、くだらねえ結婚の話題とかだつたらシバくぞ、コラア！」

「か、神楽ちゃん？　語尾が違うよ、いつもと。普通に喋っちゃってるよ」

「黙れヨ、駄眼鏡が」

新八が神楽に殴られるのを見る様子もなく、一人ジャンプを読む銀時は、更に興味なさげに言う。

「つーか神楽よオ、お前まだこんなつまんねえ昼ドラ見てたのか？」

「つまんねえって何ヨ！　さてはあなた、他に面白い女でもできた

んでしょ!？」

「どっから覚えてきたんだよ、そんな台詞!」

「台詞なんかじゃないわ、本心ヨ!」

「尚更教育に悪いわボケツ」

「うわあ、また爆弾テロですか」

唐突に新八が声を上げた。

銀時に掴みかかっていた神楽も、テレビへ視線を移す。

「ああ? どーせまたヅラが何かやらかしたんだろ」

『えー、犯行を行った攘夷浪士は数名。攘夷浪士と思われる遺体が発見されたことから、自爆テロではないかと思われています』

「自爆テロ? じゃあ桂さんは違うんじゃないですか? そんなことさせるわけないでしょ」

「そーだなア。あいつ、自分は死ぬ気でも他の攘夷浪士の犠牲は出さねえとか言ってるしな」

興味ない、と言わんばかりに、神楽はソファへ寝そべった。

『被害は膨大で、死傷者は300人を超えるものと推測されます。』

… あ、はい、今入った情報です! たった今、生存者救出のため召集された武装警察真選組が到着した模様です……!』

「へえ、真選組が動員されたんですね。結構大変みたいですよ」

「ストーリーやらマヨラーやらドSやらが役に立つのかねえ」

「どーせあいつのことアル。バズーカぶっ放して邪魔してるに決まってるヨ」

「こんな時くらい真面目に仕事するんじゃないかな、沖田さん。人の命がかかってるんだし」

神楽はソファの上でごろり、と寝返りを打つ。

すると突如、テレビから爆音が響いた。

ズドオオオオオオンツ

『きゃああああああつ！』

「…え！？」

『いつ…今、大きな爆発が再び起こりました！ 場所はビルの2階付近だと思われます…！ あつ！ 危ないっ…！ く、崩れます！ 爆発箇所から崩れていきます…！』

ガラガラガラッ

さすがの事態に、銀時も冷や汗を流す。

「…おいおい……！ ヤベエんじゃねえの…！？」

『只今入ったニュースです！ 先程の爆発で、生存者救出に向かった真選組の隊員が地下に閉じこめられた模様です！ えー、閉じこめられたのは一番隊、隊員数名は難を逃れたものの、隊長は行方不明となっています！』

「…！？」

飛び起きる神楽。

「か、かぐらちゃ…！ 確か沖田さんって一番隊の…！
彼女の頭の中では様々な言葉が渦を巻いていた。

嘘。 あいつに限って、そんなこと、あるはずがない……！

真選組で一番強いアルよ？ 瓦礫がれきくらい簡単に避けられるヨ…

『尚、一番隊隊長は生存者及び隊員を庇つての生き埋めとみられ、未だ発見はされていません！』

隊員を庇つて？

「ちよつと…神楽ちゃん！！」

気がついたら、いつもの傘を持って走り出していた。

天気は雨。濡れた前髪が額に貼り付いて鬱陶しい。

私なら、夜兎なら何とでもなるのに。

崩れたコンクリートを砕いて払い除けられる。傷だって早く癒える。

でも沖田^{あいつ}は。

あいつは、夜兎じゃないのヨ。崩れたコンクリートに砕かれてしま
うかも知れないのヨ。

それなのに隊員を庇って、だなんて。

あいつならやりかねない。解ってるから、だから。

「…！ お前、万事屋さんとの」

土埃にまみれた土方は、驚いたように言った。

目の前には雨に濡れ、肩で息をするチャイナ娘。

「どこ……」

「え？」

「あいつはッ……どこにいるアルか!？」

「“あいつ”って、総悟!？ お前まさか、総悟を助けに……!？」
神楽は思っより早く、彼の胸ぐらを掴んだ。

「どこだって訊いてるネ！」

「……地下だ、としか言いようがねえ。一番隊は別行動だったから、正確な位置は把握できてねえんだ。……だが、解ったところでお前には言えない」

神楽の眉間がぴくつと引きつる。

「何でっ!？」

「危険すぎるからに決まってるだろ。いくら夜兎とはいえ、何かあったら万事屋に何て言えばいい」
唇を噛み締める。掴んだ手に力が入る。

「……じゃあ」

「あ？」

「じゃあ、無傷で帰ってくれば良いアルね？」

「……は!？」

神楽は土方から離れ、瓦礫で埋もれた地下への入り口に駆け寄る。

「おい、待てチャイナ娘ッ……!」

ズドン!!

衝撃波が伝わる。

目を開けると、そこにはただ、土埃が舞っているだけだった。

「土方さん!？」

「! 万事屋……!!」

新八と銀時が走ってくるのが見えた。

大方、先程のチャイナ娘を追ってきたのだろう。

「神楽ちゃんは？」

訊かれると土方は苦虫を噛み潰したような顔をする。

「…え、まさか……!!」

三人は崩れたビルを見た。

薄暗かった。

空気が埃っぽくて苦しい。

それに。と神楽は思う。

恐いほどに静かだ。

無音の通路を歩く度、自らの足音だけが響く。

こんなに空虚な場所があったのか、と疑いたくなるほどに。

そして同時に、そんな場所に彼がいる。その虚ろな雰囲気、自分なら耐えきれまい。

返事が返ってくることを願いながら、神楽は声を上げた。

「サドー？ どこアルかア？」

「……………」

言葉らしきモノは自分の木霊だけ。
ぞく、と悪寒がした。

「……………あいつは、一人で行ったのか」
銀時が重い口を開く。

「…ああ」

「…てめーらんとこの一番隊長様ってそんなに非力だったか？」

「銀さん」

新八が気を遣う。

一方の土方は暗い表情のまま煙草を啜えた。

「…んなわけねえだろ。あいつがこんなことで死ぬタマかよ」

「……………」

それまで土方の傍らで話を聞いていた山崎は、ようやく顔を上げた。

「……………そう、信じただけでしょう」

「…！」

「や、山崎さん……………」

鋭い視線を山崎に向けた。

「…んだと？」

「副長だつて解ってるでしょ、普通に考えたら脱出なんて無理なんですよ。沖田さんに庇われて運良く脱出できた隊員だつて言つてたじゃないですか！」

「……………！」

山崎はもう一度俯いた。

「旦那んとこのチャイナさんだつて危ないかも知れない……………だつて、

夜鬼っていったって女の子なんですよ!？」

「…解ってる!！」

土方が振り払うように声を上げた。

掌で顔を隠す。

「一端の隊長格で、俺らん中の誰より腕が立つ、けど今あいつは一人だ。しかも生存者ア庇ったつてことは怪我もしてる。そんな中で這い上がって来いなんて言えねえよ! …けど」

絞り出すような、掠れた声に変わっていく。

「けど、信じれば、もしかしたら帰ってくるかも知れねえだろ……」

「…」

「土方さん

……」

…どれだけ歩いたのだろう。
正確な時間も距離も解らないが、もう1時間は歩いたのではないだろうか。

少し、だが。

ほんの少しなのだが、微かに血の臭いがする。

そう思うと途端に視界が揺れる。
ブンツと首を振り、神楽は前を向くのだ。
気丈にならなければ、と。

「ッ……………」

「え……？」

今、一瞬だが声のようなものが聞こえた気がした。前に進む度、自分のモノではない、荒い息づかいが近づいてくる。

生きてる……？

もしかしたら自分の捜している人物ではないかも知れない。いや、確率から言ったらその方が有り得る。

彼女はもう一度手を硬く握った。

大丈夫。助け出せる体力は充分に残っている。

暗闇から、足音が聞こえた。

「サドッ……！？」

けれど、走ってきたのは捜していた彼ではなかった。

「！ 女の子……！？ 何でこんな所に？」

中年男性と同じくらいの年齢の女性。

違いはしたものの、肩を落とすことなく、神楽は笑った。

「大丈夫アルか？ 私、ここをずーっと真っ直ぐ歩いてきたネ。だから同じように歩けば上へ帰れるアルよ」

「そ、そうなの？ でも、何でこんな所にわざわざ降りてきたの……？ ただでさえ危険なのに……」

「…真選組の」

「一番隊の人かしら！？」

「あの若い子か！ 僕たちは彼に助けてもらったんだ……！」

「……！ まだ生きてるアルか！？」

女性の表情が気まづげなものに変わる。

「ええ。…けど怪我が酷いわ。もう中にいるのは彼だけだから、早く出て、助けを呼んで」よつと思つて」

……ドクン

「……そう、アルか……」

ドクン ドクン

「早く出るアル！！ 早くっ……助けを！」

「えっ……あなたは！？」

「私は」

「あいつを迎えに行つてくるネ」

It might be a miserable story.
We are waiting single-mindedly.
However, there is offer in
g the life now.
I who is waiting can pray for
safety.
Only the believed thing can be
done.

「サド、サド、ねえ…返事しろヨー！」

生きていると解ったから。

私は名前を呼ぶことが出来るアル…。ねえ返事をして。
不安で潰れそうなのヨ、心臓が、心が。

「ッ……そーごオオオオオオ！　ここにいるんでしょオオオ！
？　いつまで怪我人ぶってるつもりアルか！？　折角私が迎えに来
たのに狸寝入りとは良い度胸ネ！」

虚しく響いていくのも気に止めず、神楽は呼び続ける。

「そーごオオオオオオオ！！！」

「……………何ですかイ」

「！」

声のする方へ駆けていく。

確実に近くなつていく荒い息づかいと 血の臭い。

「総悟……！！！」

その姿を認めたとき、神楽の目から堪えきれないほどの涙が溢れた。

「おまッ……！！！」

けれど安心することは出来ない。

何故なら彼は血まみれで、立つことすらままならなかったからだ。

情けねえ話だろ。

俺達は救出されてくる生存者を待っているんだ。
けどあいつは今、この国のために、住まう人間のために命を懸けてる。

待つてる俺は無事を祈ることしかできねえんだ。

…信じてやることしかできねえんだよ。

Who on earth will give the sea
reached safety?

「なんでイ。チャイナか」

神楽は溜め息混じりに言われた言葉に、腹を立てる事も出来ずにいた。

「大丈夫、アルか…その怪我」

恐る恐る指を指す。

所々破れている隊服から見える細く白い腕。
そしてその肩から流れる鮮血。

それは同じように左目の上からも。

沖田は小さく舌打ちをした。

「…何でアンタが来るんでイ」

その言葉に、神楽の額に青筋が浮かんだ。

「なッ……！ お前、助けに来てもらってその言いぐさは何アルか！？」

驚いたように神楽を見上げる沖田。

けれど、顔を隠すように俯き、クスツと笑った。

「！ 何で笑ってるアルかアアア！？」

「や、悪イ。アンタがあまりに可愛くて」

「は」

神楽はきよとんとして彼を見下ろした。

「…え、今なんて」

「アンタ、自分の顔、見えねえもんねイ」

「は？」

沖田は動かせる右手で神楽を引っ張る。

「うあっ！？」

「泣いてるゼイ？」

そう言つと涙を拭き、前傾姿勢を取つて、軽くキスをした。

「……！」

「……ん？ 何か……」

「な、なななな」

混乱する神楽を尻目に、沖田はぺろつと舌を出した。

「しゅっぱい……」

「は!?!」

「あれ、酸っぱいと予想してたんだがねィ……まさかしょっぱいな
んて」

「…どっちも嫌ネ。…っーか何でき、きききキスしてるアルか!?!」

「何でつてそりゃあ、したかったから?」

「そんなん理由になると思ってたんのか!?!」

「理由なんてそんなもんでしょう。あーちょっと胸ぐら掴まないで、
俺今怪我してんだぜィ?」

「知るかアアアアアアアア」

「痛い痛い」

ドクン

「っ……………」

「え、さ、サド?」

ドクンドクンドクン

「……………つてえ」

と、沖田が額に冷や汗を滲ませると、神楽の背後の壁が崩れるの
は同時だった。

探し求めていた安心を、
一体誰がくれるのでしょうか？

「神楽ッ……………!!」

「え」

立つことも出来なかった沖田が自分に覆い被さってきた。
その動きに驚くのは無理ないが、神楽をもっと驚かせたのは、その
直後に襲ってきた衝撃だった。

「ッ……」

「ちゅ…ど…っ」

耳元で荒く呼吸をする沖田。

覆い被さられているために、その表情すら窺えない。けれど。

ぼた、と白い手の甲に赤い何かが零れたのを見て、何が起きたのかを悟った。

「そーご！ 大丈夫アルか！？ 怪我はっ……」

「動くなっ！！」

「！」

一際強い声音。今まで聞いたこともないような声に、神楽は戸惑う。

「まだ……崩れてくるから、だから、頼む………動くな」

「そんなこと頼まれたって困るネ。私はお前を助けに来たのヨ？」
か細くなつていく沖田の声に不安を抱きながら。

「……ハアツ……う」

痛みを必死に堪える彼の低い呻き声を、これ以上聞くななんて出来な
いと思つた。

彼に負担を与えないように気を遣いながら、体制を整える。

うつ伏せだった身体を仰向けにすると、沖田は瓦礫を背中に、神楽
を庇っていた。

「っ………動くなつて、言つて、る……だろイ………」

まるで背に乗ったコンクリートの重さに耐えられなくなったように、
倒れ込む。

その身体はとても重くて、神楽は「ああ」と声を漏らした。

こんなに重い瓦礫を背負つて、重傷を負つて、それでも護ろうとす
るのだ、と。

白い手で、彼の色素の薄い髪を触る。

栗色の髪はサラサラとしていて、埃を被っているのが残念だった。

「……見られなくなかつたんだ」

ぼつりと沖田が言った。

「…何を？」

「こんな姿、アンタにだけは」

「何でアルか…？ 私じゃ嫌ってことアルか？」

「違エんだ…。だって情けねえだろイ。血まみれで、満足に動けねえなんて」

神楽は微笑んだ。

「らしくないこと言うなヨ。気持ち悪いネ」

「くは」と沖田も笑う。

「そーだねイ」

「…ねえ、総悟」

沖田は返事はしなかった。

けれど気にする様子もなく、続ける。

「お前の髪、近くで見たらすごく綺麗ネ。きつとお日様の下ならもつとキラキラするアル。だから」

だから

「またお日様の下に行こう。私、傘使わないと駄目だけど、でも、

綺麗なお前の髪が見たいから」

「……………」

「だから……………帰ろう。生きて、またいつもの河原で喧嘩しよう。ねえ、聞いているアルか、総悟……………」

か細い吐息。

もう彼には返事をする気力は残っていないのだ。

「総悟、ねえ、私が…ちゃんと連れて行くから、だから」

死なないで

「！人が…生存者が！副長！」

山崎が叫んだ。

土方はその声を聞き、銀時たちから視線を外し、山崎に駆け寄った。

「生存者！？まさか、あのチャイナ娘と総悟が……！？」

中年の男性と女性。

土埃にまみれた二人は、慌てて土方に訴える。

「早く、早く…！二人を助けに行ってください……！」

「二人って」

「真選組の若い彼と、中国人みたいな女の子。さっきすれ違っただけ、通路を教えてもらったんだ」

「私たち、彼に瓦礫から護ってもらったの。だからすごい怪我をしているはずよ…」

「…解りました、とりあえずアンタ方は救急車へ移動して下さい。

……山崎」

「はいつ！ こちらへ」

二人が無事に移動したのを確認すると、土方は新しい煙草を啜える。

「…土方さん」

新八が声を掛けた。

「万事屋、すまねえ」

「あ？」

銀時が片眉を上げる。

「もしあの娘に何かあったら、俺の責任だ」

「くっだらねエ。んなこと言ってる暇あったら、さっさと助けに

」

ドオオオオオオオオオオ !

「!?!」

「な、何…!?!」

目を凝らせば、砂煙の向こうに、人影が見えた。

「…!?!」

「か、神楽……」

「銀さん……神楽ちゃんだけじゃないです、もう一人、いますよ……！」

土方は啞えていた煙草を落とした。

「総悟つ……………！！！」

「！ふ、副長！」

「山崎！早く近藤さんに連絡しろ！」

「はい！」

神楽は沖田を背負っていた。

息を切らせて、足を引きずりながら、近づいてくる。

「ぎんちゃ
…」

「神楽！」

「神楽ちゃんっ」

意識を手放した神楽は、その場で崩れ落ちた。

それから数ヶ月後。

彼女はいつもと同じように、あの河川敷を歩いていた。

太陽の日差しでキラキラと輝く、色素の薄い彼を捜しながら。

「どこにいるアルか？ どーせ、ここでサボってるのは解ってるネ」

「手厳しいねイ。俺アいつも真面目に仕事してますぜイ？」

「…ほら、やっぱりいたネ」

ひょこつと顔を出すと、日陰に、彼がいた。

まだ頭に包帯を巻き、頬にガーゼを貼ってはいるものの、大分良くなっただらしい。

激しい運動を止められているので、神楽としては面白くないが。

神楽の顔を見るなり、沖田はにこりと笑った。

「…何、笑ってるネ？」

「いや…降りてこないんですかイ？」

渋々、下へ降りてくると、少しだけ距離を置き、座った。

「…もう大丈夫アルか」

「何がです？」

「怪我に決まってるネ。他に何かあるっていうアルか」

クス。

「また笑うネ」

「いやあ……生きてるんだなと思って」

「当たり前ヨ。私が助けてやったアル。感謝するヨロシ」

「そーだったっけ？ ……ま、一応お礼は言っておきますがねィ」

「…ねえ、覚えてるアルか？」

「何を」

「お日様の下で、お前の髪を見たいって言ったの」

「…そんなこと言いましたっけ？」

「言ったネ。気絶してたなんて言わせないアルよ？」

「本当にしてたんですけどねィ」

「早く行くヨロシ」

「へいへい」

気怠げに日の下へ行つた彼の姿はとても輝いて見えて。

「あ、そういえばアンタ、俺が助けてやったこと、覚えてますよね
イ？ 忘れたなんて言わせませんけど」

「あ…？」

「特別に教えてやりませア。…アンタじゃなけりゃ、あんな無理は
しやせんよ、俺ア」

「でも他の人たちも庇ったって…！」

「コンクリ斬っただけでさア。その破片で切った怪我ばかりです
し。身体張るなんて、アンタじゃなきややりません」

「…！」

「…お礼は？」

「は！？」

「護ってもらったお礼。…キスで良いですぜ？」

「ふざけんよッ」

「じゃ、無理矢理もらうだけですけどねィ」

「…こんなのがお礼で良いんなら

「え？」

「これから私を護るヨロシ」

キラキラと太陽の光を浴びながら、彼は微笑んだ。

「任せときなせエ」

009 (後書き)

次回は後書きになります。

000：後書き

…というわけで完結です。

『瓦礫に日傘』どうでしたでしょうか。

私にとってはすごく長く感じました全9回。

長期連載されてる先生方は本当にすごいと思います。心から尊敬します。

銀魂の原作とかアニメとか知ってる方は解ると思いますが、銀魂でシリアスって難しいですね。

でも私が書くときすごい暗くなるって…

ギャグ書いても暗くなる^p^

けどシリアスにもなりきれてない…(おい

読んでいただければ解るように、私は格好いい女の子が好きです。

勿論男の子も好きですけど^ ^

その点、神楽ちゃんと沖田さんはピッタリだと思います。

ちょっとキャラ崩壊し気味ですけど

とにもかくにも、楽しく書けました。

沖神が一番好きなCPです。

土方さんを格好良く書けなかったのが心残りですが、

今度は土ミツを書きたいな…

沖神もまた書きたいので、リクエストでもあれば言って下さると嬉しいです^ ^

連載でも読み切りでもどんとこい！w

ノーマルは基本的に大好物なので。

ちなみに神楽ちゃん、は沖田さん専用だとおもいm()蹴
マイナーな高妙も土妙も好きです。なかなか書けません…

あれ、後書きのつもりが長い自己紹介になった感じ

此処まで読んで下さった心優しい方、ありがとうございました！
これからも沖神を愛していきましょう！
そしてこれからも槻夜を宜しく願います！！

また、あの河原で会えると約束をして

槻夜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0693f/>

瓦礫に日傘/銀魂/沖神

2010年10月9日13時38分発行